

1. 評価結果概要表

作成日平成 19年 10月 10日

【評価実施概要】

事業所番号	4270800305
法人名	有限会社 グループホーム・元気の家
事業所名	有限会社 グループホーム・元気の家
所在地 (電話番号)	長崎県松浦市志佐町赤木免253 (電 話) 0956-72-3811

評価機関名	SEO (株)福祉サービス評価機構		
所在地	福岡市博多区博多駅南4-2-10 南近代ビル5F		
訪問調査日	平成 19年 10月 9日	評価確定日	平成 19年 11月 2日

【情報提供票より】(平成 19年 7月 1日事業所記入)

(1)組織概要

開設年月日	平成 15年 3月 1日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	10 人	常勤 6人, 非常勤 4人, 常勤換算 人	

(2)建物概要

建物形態	単独	改築
建物構造	和風	造り
	2 階建て	1 階 ～ 階部分

(3)利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	9,000 円	その他の経費(月額)	円
敷 金	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	
食材料費	朝食	160 円	昼食 310 円
	夕食	310 円	おやつ 100 円
	または1日当たり 880 円		

(4)利用者の概要

利用者人数	9 名	男性 2 名	女性 7 名
要介護1	2 名	要介護2	2 名
要介護3	2 名	要介護4	1 名
要介護5	2 名	要支援2	名
年齢	平均 85 歳	最低 59 歳	最高 94 歳

(5)協力医療機関

協力医療機関名	松浦市民病院(内科、眼科)、森歯科医院
---------	---------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

果樹が植わる広い敷地の中に建つ、築80年の農家を改造したホームで、古い庭木のある庭、縁側、土間等、入居者が馴染まれているであろう環境が残されており、入居者が、自宅にいと勘違いされながら、昔話や思い出話を語ってくださることも多いとのこと。「長い人生の最後のひとときを、思うままに楽しく過ごしていただきたい」との思いから、柔軟且つ細やかな対応がされており、遠方であっても、冠婚葬祭や過去の勤め先のOB会に職員が付き添ってお連れしたり、入居者が寂しそうな時は運営者(管理者)が居室に寝泊りしたり、遅くまで残って夜間入浴希望に対応したりしている。開設から4年半、定年等で若干の退職はあるものの職員の入れ替わりはほとんどなく、入居者もほぼ半数が開業以来の方とのことで、子育て中の職員には子供を連れての出勤も認めており、孫の世代まで含めた馴染みの関係を背景とした、“家族としての当たり前の暮らし”が目指されている。質の向上にも積極的なホームであり、法人代表(管理者)自らが認知症ケア専門士を取得している他、働きながら2級ヘルパーや介護福祉士資格を取得した職員も多い。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4) ①よりこまめな空調管理ができるよう、温湿度計を各居室・共用空間に設置し、ホーム内での差にも配慮しながら、調整をしている。②介護計画については、全職員が主体的に関わり、かつ負担が大きくなりすぎないよう、2名のペアで担当制にし、BS法も採り入れ、充実を図っている。③台所まわりの衛生管理の強化のために、換気扇・冷蔵庫・茶碗等の掃除・消毒、生ゴミの処理の頻度・担当者・方法等を具体的に定め、チェック表も作成した。
	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4) 自己評価は、毎回、まず各職員に「自己評価票」を配布し、記入してもらい、職員間で話し合いで1つにまとめてもらった上で、最後に主任・管理者が確認するようにしているとのことで、職員主体で進められている。
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6) 現在は、「ホームの役割、認知症、外部評価の意義等を多くの方に理解いただく段階」と位置づけ、形式にこだわらず、まずは多くの方に参加いただくことを目指し、夏祭り合わせて行ったり、見学に来られた他事業所の職員に出席してもらったりしている。委員は固定化しておらず、何か一つの課題について、話し合いをして決定していくという会議にはまだなっていないが、「消防署に来てもらって、救命救急講習を受けたら?」「会議には、警察にも参加してもらったら?」等の意見はいただいており、現在、実現に向けて準備をしている。
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8) 以前は「ホーム便り」を作成・郵送していたが、主介護者でない遠方の親族も、入居者の様子を知りたいという希望があることを踏まえ、ホームページを立ち上げた。家族来訪時には、家族が話し易いようにと、管理者が玄関先まで見送り、何か気になることがないか、声かけをするようにしている他、意見箱も設置している。これまで家族からは意見・苦情は挙がっていないが、入居者からはいただいたことがあり、記録に残し、会議で話し合いをし、対応させていただいたとのことで、今後、家族から意見をいただいた時も、積極的に運営に反映させていきたいとのこと。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3) 町内会に加入はしていないが、管理者・職員が、招待を受けて地域の催しや草刈等の活動に参加している。危険なこともあり、それらに入居者が参加されることは現在はないが、散歩の折に空き缶を拾っていただいたりしている。地域の祭り・運動会・バザーには、入居者をお連れしたり、作品を出品したりしている。小・中学生の職場体験、ヘルパー実習の受入もしている。日頃より、近隣の方・保険外行員・役所担当者・警官等が、よくホームに立ち寄られるとのこと。

2. 評価結果(詳細)

(☐ 部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	平成15年の開設時に、職員と話し合って5カ条からなる運営理念を作った。法人代表(管理者)は、特に2条の「家庭的雰囲気をつくり～」と、5条の「何事もオープンで、だれもが心やすく集まり、なごやかなホームにします」に思い入れが強いとのこと。ホームが地域に受け入れていただかなければ、入居者が孤立してしまうとの思いから、開設当初から、地域に溶け込むことを大切に考え、その思いを理念の5条に盛り込んだとのこと。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	毎日朝礼で唱和しており、理念は職員に周知されている。第3条に「自立支援」を掲げているが、管理者は、「自立支援とは、『自分でできることをしていただくこと』ではなく、『自分でしようという思いを引き出すこと』と職員に話しており、「入居者にしていただくことを重視し過ぎて、声かけや誘導が強くなり過ぎたりしないよう、入居者にしていただくまでの過程を大切にしよう指導しており、職員も心がけている。	○	職員の「自立支援」の意味の理解をより深め、一方的な声かけ・誘導をせず、体調・気分の変化を汲み取って、労わったり励ましたり柔軟な対応をし、入居者に「したい」という気持ちを持っていただくということを、今後も徹底していきたいとのこと。理念の一つ一つのより深い理解・実践を期待する。
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	町内会に加入はしていないが、管理者・職員が、招待を受けて地域の催しや草刈等の活動に参加している。危険なこともあり、それらに入居者が参加されることは現在はないが、散歩の折に空き缶を拾っていただいたりしている。地域の祭り・運動会・バザーには、入居者をお連れしたり、作品を出品したりしている。小・中学生の職場体験、ヘルパー実習の受入もしている。日頃より、近隣の方・保険外行員・役所担当者・警官等が、よくホームに立ち寄られるとのこと。	○	心身状況から地域の祭りに参加することが難しい方にも楽しんでいただきたいと、ホーム敷地で毎年夏祭りを開催しており、70名近くの方が来られる。ホームとしては、そのような取り組みを行いながらも、今後も地域の夏祭りや運動会へ、全入居者をお連れしたいと考えているとのこと。時間・移動手段・ボランティアの活用等、今後も引き続き検討を続けて、少しでも参加者・機会が増えることを期待したい。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	職員の入れ替わりが少なく、多くの職員がこれまで自己評価・外部評価を経験しており、管理者が、評価を受ける度に意義を話しているため、職員に浸透している。前回の外部評価結果については、全職員で話し合いをし、「改善計画」を作成して取り組んだ。自己評価は、毎回、まず各職員に「自己評価票」を配布し、記入してもらい、職員間で話し合いで1つにまとめてもらった上で、最後に主任・管理者が確認するようにしているとのこと、職員主体で進められている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現在は、「ホームの役割、認知症、外部評価の意義等を多くの方に理解いただく段階」と位置づけ、形式にこだわらず、まずは多くの方に参加いただくことを目指し、夏祭りと合わせて行ったり、見学に来られた他事業所の職員に出席してもらったりしている。委員は固定化しておらず、何か一つの課題について、話し合いをして決定していくという会議にはなっていないが、出席者にいただいた意見は大切に、実施に向けて準備をしている。	○	これまでも、ホームを地域にオープンにし、様々な機会を通して、グループホームや認知症への理解を深める取り組みをしてきているが、「地域密着型サービス」「運営推進会議」「外部評価」等の制度については特に、充分理解いただけているとは言いがたく、今後も、積極的に取り組んでいきたいとのこと。まずは、これまでの“理解を深める取り組み”を継続し、徐々に、会議が“ホーム運営について意見をいただき、話し合っていく場”となっていくよう、段階を追って充実を図っていくことを期待したい。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	管理者が市の地域密着型サービス推進委員を務めており、他ホームから相談を受け、それらの解決のために、市に出向くことも多いとのこと。成年後見制度について相談したこともある。市の職員がホームに立ち寄ることもあり、市とは密接な関係が築かれているが、現在、運営推進会議の委員を固定化していないこともあり、市職員の出席はまだない。	○	一度、会議への出席を依頼したが、市側に事情があったようで、出席いただけず、それ以来、ホーム側も積極的に働きかけはしていなかったとのことで、改めて、出席の依頼をしていくことが望まれる。運営推進会議を、“家族・地域の方に、最新の介護情報を提供する場”と位置づけ、権利擁護や高齢者の健康について話をしていただけるよう市職員に協力を依頼するのも良いと思われる。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	以前は「ホーム便り」を作成・郵送していたが、主介護者でない遠方の親族も、入居者の様子を知りたいという希望があることを踏まえ、ホームページを立ち上げた。利用料はなるべく振り込みでなく持参いただくようお願いしており、ほぼ月1回は面会があるので、来訪時に、金銭管理も含めて報告している。事情で面会が難しい家族に対しては、手紙をお送りしたり電話をかけたたりしている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	来訪時は、家族が話し易いようにと、管理者が玄関先まで見送り、声かけするようにしている他、直接では言いにくいこともあるのではないかとその思いから、意見箱を設置している。これまで家族からは意見・苦情は挙がっていないが、入居者からはいただいたことがあり、記録に残し、会議で話し合いをし、職員間で情報を共有し、対応させていただいたとのことで、今後、家族から意見をいただいた時も、積極的に運営に反映させていきたいとのこと。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	この1年は家庭の事情による退職が1名のみで、開設から4年半、定年等で若干の退職はあるものの、職員の入れ替わりは少ない。勤務希望には極力応じ、子供連れでの出勤も認め、働きやすい環境作りに努めている。個人面談をして悩みを聞いたり、食事会を開く他、毎年職員旅行もしている。新規採用時は、正式に業務に就く前に、何日間かホーム来て入居者と過ごしてもらうようにしており、入居者・職員両者が、無理のない形で関係を築いていけるようにしている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	運営者は、職員研修を重視しており、月1～3回、内部研修を開くとともに、県・市・事業者協議会の研修に、レベルに合わせて職員を派遣している。仕事をしながら2級ヘルパーや介護福祉士資格を取得した職員も多い。管理者は、各職員に、資格・資質を活かしてそれぞれ役割をもってもらい、チームとしてホームが運営されることを目標にし、現在、過重負担とならないようにしながら職員のレベルを把握する目的で、1年交替で主任業務をしてもらっているとのこと。	○	管理者は、研修受講・資格取得については、職員の自主性が大切と考えているとのこと。毎年度最初に、職員自ら、目標・学びたいことを明記してもらい、受けた研修の記録を残していくのも、職員の意欲向上・計画的な研修受講に有意義と思われるので、職員一人ひとりが、より積極的に研修に参加し、段階的に知識・技術向上を目指していける仕組み作りを検討していくことを期待したい。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	運営者は、同業者との交流の大切さを認識しており、日頃より、情報交換・相談等をしている。ホーム行事の時は、互いに訪問してボランティアで手伝いし合っているとのこと。管理者が市の地域密着型サービス運営委員を務めており、他ホームから相談を受けることも多く、他ホームの職員の実習の受入もしている。	○	当ホームでの研修の受入をしている一方、他グループホームへの職員派遣(研修)は、先方の受入体制が整わず、実行できていないとのこと。管理者が以前勤めていた施設へは、全職員が現場研修に行ったが、やはり職員は、グループホームでの研修を望んでおり、今後も実施に向けて、継続的に働きかけをしていきたいとのこと。実現を期待したい。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	これまで、家族からの連絡・面談から入居になられる方が多かったが、予め本人と家族の間で十分な話し合いができており、本人が理解・納得されないままでの入居はなく、入居後、帰宅願望を訴えられる方もいなかったとのこと。短期利用で馴染まれてから入居していただくようにしており、入居後2～3日は、本人が安心されるよう、運営者(管理者)が居室に寝泊りするようにしているとのこと。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	鬼火焚き等の昔の風習、冠婚葬祭のマナー、季節料理等について教えていただいている。知っている職員も、「なぜ、鬼火焚きをするの？」など、敢えて問いかけをし、入居者に語っていただく場面を作るようにしている。入居者の語られる昔話の中で、体験された喜怒哀楽に共感し、また、人生経験を踏まえて励ましていただくことも多いとのこと。職員が子供を連れて出勤することもあり、3～4世代にわたった「家族」のような雰囲気、接せさせていただいているとのこと。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者の何気ない一言、独り言にも耳を傾け、それが実現できるよう努めている。毎年行っているクリスマスのイルミネーションも、実際にお連れすることは難しい中で、ミサに参加したいと思われている入居者の気持ちを慮って始めたとのこと。心身状況が重度で、明確な意思表示や発語が難しい方もおられるが、声のトーンを変えて声かけしたり、スキンシップをしたりして、ちょっとした表情の変化も観察し、希望・気持ちを把握することに努めている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	前回の外部評価を契機に、職員の気づきや意見をより多く計画に盛り込めるよう、職員の負担にも配慮して2名1組での担当制とし、各担当が作成した案を会議で諮り、他の職員の意見も採り入れながら作成するようにしている。課題・目標ともに、入居者の視点に立ったものになっているが、実際に行っているケアの一部分しか「介護計画」に記載されていないようにも見受けられる。家族にも、来訪時や電話で要望をお聞きしているが、「おまかせします」と言われることが多く、具体的に意見をいただくことは少ないとのこと。	○	(外部評価項目No15・16) 「介護計画」は、ケアの拠り所となる物であるため、原則、現在行われているケアは、「介護計画」に記載(別途、「個別介護手順書」を作成しても可)していくことが望まれる。その際、入居者の望みや好きなこと・過去の習慣を踏まえて、「いつ」「どこに」「どのくらい(時間・回数・距離等)」といったことを盛り込むと、職員にとってケアの内容がより明確になり、ケアが平準化されるとともに、モニタリングの時に、「目標が達成できたか」「ケア内容が計画通り行われたか」の評価が具体的に行え、次の目標設定・ケアの見直しが適切に行えるようになると思われる。また、計画の記載をより具体的に、「この点についていかがですか?」とお尋ねすると、家族も更に意見が言い易くなると思われる。計画の更なる充実を期待したい。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	3～6カ月毎に見直しをしている。全利用者について、ミーティングで、変化の兆しや、ケアの変更の必要性の話し合いを行い、状態変化に合わせて柔軟に対応しているが、計画の書き直し自体は、遅れてしまうこともあるとのこと。	○	ケアの見直しをした時は、変更したケア内容を職員に徹底するとともに、入居者・家族にも理解いただけるよう、できるだけ速やかに計画の書き直しを行うことが望まれる。取組みを期待したい。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	短期利用をしていただいて馴染みの関係を築いてから入居していただくようにしている。買い物、役所回り、教会・寺・お墓参りといった、入居前に日常的にされていた外出を継続していただくとともに、市外も含めて、冠婚葬祭や過去の勤め先のOB会に、ホーム職員が付き添ってお連れしたりもしている。長期加療が予想されたが、入居者に「ホームに帰りたい」という強い希望があったため、3カ月、空き室にしてお待ちしたこともある。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホームとして協力医療機関も確保しているが、基本的に入居前のかかりつけ医で受診していただいている。家族が希望される場合を除いて、どんなに遠方(市外)でもホームで通院介助をするようにしているとのことで、入居者それぞれの主治医と、いつでも相談できる関係を築いている。受診結果は家族に報告し、家族が通院介助された時には、家族から話をお聞きしている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	以前は、当ホームではターミナルケアは難しいと判断し、その旨、入居時に説明していたが、「最期までホームで」と強く望まれ、主治医の協力が得られた事例があったことから、現在は、入居に際し、まず、重度化された時の希望をお聞きした上で、そのような状態が予測される方については、主治医・家族・職員の3者で話し合いをし、対応の方針を決めている。方針は職員にも共有されており、マニュアルを事務所に掲示し、緊急時に対応できるよう備えている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員で注意しあって、記録のとり方も含めて、入居者の自尊心を大切にするケアに努めている。入居者が馴染まれていることから、方言を使ったり、時折、「○○ちゃん」とお呼びすることもあるが、常に目上の方に対する尊敬の念を持って接するようにしている。飲食店で、「これなら召し上がれるかな」と職員間で話したり、地域の方からの入居者を心配してお尋ねに様子をお伝えすることもあるが、個人名を出さないように気をつけており、個人情報保護に努めている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「寝たい時に寝て、食べたい時に食べて、出かけたい時に外に出ていただく」という方針で、入居者それぞれのペース・気分で過ごしていただいている。日中は、職員3名の他に管理者が勤務している体制なので、急な要望にも、極力対応しているとのこと。心身状況が重度で、自ら意思表示をされたり行動をされることが少ない方に対しては、声かけ・スキンシップを繰り返し、孤独感を感じられることがないように努めている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	献立作成・食材の買出し・下ごしらえ・味見・配膳・下膳・食器洗い・片付け・テーブル拭き等をお手伝いいただいている。旬の食材やホームの畑で採れた物を食卓に上らせたり、“およごし”等、入居者が馴染まれているおかずをメニューに採り入れたりしている。天気の良い日は、庭で食事をすることもある。食器は、陶芸教室で作った物も含め、個人毎の物を使っている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	原則、週3回を入浴日としているが、他の日にも希望があれば対応し、夜間希望が出た時は、管理者が残る形で可能にしている。浴室はかなり広いが、一人ずつ入っていただいている。一方、遊びに来た子供と一緒に入っていただいたり、職員が裸になって一緒に入ったりもしている。菖蒲湯・ゆず湯をする他、温泉にお連れすることもある。窓を開けて景色を眺めながら入っていただく事が多いが、天気の悪い日にも楽しく入浴していただけるよう、浴室内に飾りもしている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	調理・洗濯・掃除に参加いただいたり、チラシや新聞でかごやゴミ箱を作っていたり、包丁や鎌を研いでいただいたりしている。心身状況が重度で、意思疎通が難しい入居者に対しても、喜ばれる物品を用意し、声かけ、スキンシップをしてコミュニケーションを図っている。入居者の誕生祝いは、必ず一人ひとり当日するようにしており、泡立て、メレンゲ作り等、入居者それぞれにできる範囲で参加いただきながらケーキを作り、お祝いしている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	広い畑の中央に舗装した遊歩道を作り、足元が不安定になられた方にも、散歩・収穫に参加していただけるようにした。入居前の習慣の継続のために、職員が送迎して教会・寺にお連れしたりする一方、出先での理解・見守りの協力が得られ、危険がない場合は、自由に外出していただいております。毎日の町内放送の内容に合わせて、役所・銀行・郵便局等にタクシーを呼んで一人で出かけている方もおられる。外部評価前月には、車ではなく列車に乗っての旅行も行った。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	敷地出入口、玄関、裏口のすべてについて、日中は施錠していない。昼間は、職員3名の他に管理者が勤務しており、1対1のケアが必要な場合にも、それによる見守りの隙ができない人員体制になっている。毎朝、職員で、勤務分担を決め、持ち場を離れる時は、必ず声かけしあっている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年4回、入居者の参加のもと、避難訓練を行っている。夜間想定訓練も行った。近隣に協力依頼し、非常時に自動的に連絡がいく装置の緊急通報網に入っていたが、これまで地域の方に訓練に参加いただいたりしたことはない。災害時備蓄も、ホームとしては特に行っていない。	○	実際に災害が起きた時に、地域の方に迅速・具体的に協力いただくためには、日頃より、避難訓練に参加いただくことも効果的と思われる。運営推進会議で、地域の方にどのような協力がいただけるか話し合いを行い明確な形で協力依頼をするともに、訓練への参加の呼びかけもしてみたい。災害時備蓄についても、何が必要か、職員と話し合いを行ったり、運営推進会議で意見をお聞きしたりしながら、順次、整えていくことを期待したい。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食材・調理方法・盛り付けのしかたを、嗜好に合わせて個別対応している。主治医に献立を見せ、カロリー・栄養バランスに問題がないかチェックをしてもらっている。食事・水分ともに、摂取量の把握・記録を行っており、特に水分については、毎日、3時のお茶に何が飲みたいかお聞きする等、充分に摂っていただく配慮をしている。入居者が馴染まれていること、及び栄養面への配慮から、主食は麦ごはんになっている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	果樹が植わる広い敷地の中に建つ、築80年の民家(農家)改造のホームで、古い庭木のある庭、縁側、土間等、入居者が馴染まれているであろう環境が残されており、内部も壁・柱で適度に空間が区切られていることが、入居者にとって落ち着ける雰囲気になっていると感じられる。細やかな空調管理のための温湿度計の各所への設置、明るさが調整できる照明器具の備付等、入居者にとって快適な環境を作るための取り組みがされているとともに、匂い・音・話し声といった生活感を感じていただける配慮もされている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者が馴染まれていること、家族来訪時に寛いでいただけるであろうことから、全室、畳にしており、その上にベッドを置いていただいている。特にホームで備え付けているものではなく、すべて使いなれた物を持ち込んでいただいている。居室の窓から見える庭や周囲の風景も、入居者が馴染まれている景色であろうと思われ、入居者にとって寛げる空間となっているであろうことがうかがわれる。		